

近年の人文研究におけるコンピュータ利用をめぐる

— 近刊『電脳国文学』（漢字文献情報処理研究会編）を中心に —

神 立 孝 一

はじめに

一九九七年の十二月から翌年七月にかけて、『日本歴史』誌上において「特集（コンピュータと日本史研究）」が連載された。人文研究、なかんずく日本史の分野でも、各研究者が独自の方法でパーソナルコンピュータ（以下、パソコンとする。この用語の使用には様々な見解があるようだが、今や一般的なものとして定着している。あえて、その使用をさける理由はないと思う）とつきあい、研究を重ねることがようやくよく認知された感があった。実際、人文系の研究現場でのパソコン利用が普及しただすのは、一九九〇年代に入ってからであろう。それまでは、大型コンピュータは用いられていたが、個人的な研究で使用するケースはほとんどなかったといつてよい。それは、大きさや価格という点が最大の理由であるが、おおよそコンピュータに縁のない人文分野での使用には、思いも至らなかったということもまた大きな要因の一つだったのではなからうか。しかし、現在ではパソコン抜きの研究はおおよそ想像しがたい。これは、歴史でも文学でも同じであろう。研究現場は、この一〇年間で大きく変貌したのである。

そこで本稿では、こうした現況を一度整理してみようと思う。このきっかけを与えてくれたのが、二〇〇〇年一〇月に発刊された『電脳国文学』（漢字文献情報処理研究会編、好文出版）であった。この本は、タイトルからも分かるように、国文学の研究者や愛好者向けに書かれたものである。しかしながら、その内容は広く人文分野を含んでいるといつても過言ではない。特に歴史学と重なっている点が多々ある。そこで、同書に導かれながら、人文研究におけるパソコンの有効活用法も考えてみたい。

一 人文分野におけるコンピュータ利用の研究史

人文研究の中でも歴史分野において、パソコンを用いた研究法が広く公表された初期のものは、中野栄夫『コンピュータ歴史学のすすめ』（一九九四年、名著出版）であった。まだまだ一般的ではなかったパソコンで、文章を入力しデータベースをつくる方法を、特定のソフトに偏ってはいないものの、解説された意味は大きかったと思う。すくなくとも、パソコンは利用できる、ということを経史分野の研究者たちにアピールした。

だが、その利用範囲はごく限定されたものでもあった。ある特定の機種とソフトがなければ、何も変化がないのだから。そうした限界を超えるためには、より基本的で一般的な歴史研究とパソコンとのつながりが明らかにされなければならない。それを意図して発刊されたのが、イギリスの若手研究者であるイーヴァン・モーズリーとトーマス・ムンクの『コンピュータで歴史を読む』（翻訳本一九九七年刊、訳者代表・安澤秀一、有斐閣）である。

基本的な考え方や、データベースという歴史研究には切っても切れない技法の紹介と、その概念と使用方法、さらには使用結果が示され、歴史研究におけるパソコン利用の有効性が主張されている。

これらの著書が刊行される背景には、様々な研究会の開催と研究誌の存在があつたことはいうまでもない。大小様々な学会や研究会が存在しているが、その代表的なものをいくつかあげてみよう。

まず、情報知識学会の設立である。一九九〇年に、理系と文系を統合した形の学際的な同学会が発足し、同年十二月に機関誌である『情報知識学会誌』の創刊号が発行された。そこには、自然科学・社会科学の諸論稿に混じって、長瀬真理氏の「日本語―英語対照『源氏物語』のテキスト・データベースの作成に関する基礎的研究」という、人文系の論文が掲載されている。その後、機関誌の発刊と共に一九九三年からは年に一度「研究報告会」が開催され、様々な分野からの成果が発表されている。だが、この学会でもっとも注目すべきことは、人文社会系部会の「歴史研究と電算機利用」ワークショップが、一九九〇年から連続して開催されていた点である。開始初期の頃は、サブタイトルとして「院生

のためのワークショップ」といったタイトルが付されていたが（小口雅史「歴史研究と電算機利用の可能性―歴史系（日本史・経済史・社会史）大学院生を主たる対象とするワークショップ」の開催『弘前大学国史研究』九一、一九九一年に紹介記事がある）、その後は様々な人文分野、特に歴史関連の報告が中心となって開催されてきたのである。ここでは、人文研究におけるパソコン利用のケーススタディから、それに伴う各種の問題、そしてインターネット関連やデータベースの課題など、広い範囲のテーマで議論が展開された。そのために、文字鏡研究会や漢字文献情報処理研究会との交流も生まれ、人文研究におけるパソコン利用の共通認識が確立されていった。

また、既に一九八〇年代から開発されていた東京大学史料編纂所歴史情報システム（SHIPS）の存在も、忘れてはならないだろう。このシステムは一九九〇年代に入ってから、多くの研究者の知るところとなり、利用が可能になった。それまでの数年間は、あくまでも実験的なものであり、編纂所内の史料管理といった点に重点がおかれたものであったようだ（永村真「コンピュータと歴史学」、岩波講座『日本通史』別巻3所収、一九九五年、岩波書店）。これらはその後、SHIPS for Internetへと進化して、ウェブ上での利用が可能となっている。また、一九九八年からは「歴史学のためのウェブサイト」経験交流会（二〇〇一年三月に第四回目が開催された）、二〇〇〇年からは「前近代日本の史料遺産プロジェクト」が始まり、歴史研究におけるコンピュータ利用と史料の電子化問題の深化がはかられている。

一方、研究誌で注目したいのが一九九三年に創刊された『人文学と情

報処理』である（現在は、SCIENCE of HUMANITYと誌名変更）。第一号の特集テーマは「人文学におけるコンピュータ利用の現在」であった。その後、毎号ごとに多方面にわたる特集が組まれているが、特に歴史分野に限定してそれらを拾い集めてみると、「歴史研究と情報処理」（第七号、一九九五年五月）、「明日の考古学をひらく」（第一号、一九九六年四月）、「重点領域研究人文科学とコンピュータ」（第二号、一九九七年三月）、「挑戦古文書OCR」（第一八号、一九九八年十一月）、「日本史研究の情報化」（第二号、一九九九年七月）などが散見される。どれをとっても、なかなか刺激的な内容といえる。

こうした研究状況を、その基盤で支えていたと思えるのが通信情報網である。その典型は、一九九〇年十一月に設立されたニフティ・サーブの「歴史フォーラム」であった。ここでは、歴史愛好者たちがそれぞれの立場から様々なことを語り合っているわけであるが、専門の研究者も混じっていた。いくつかの専門的な会議室が設定されたり、「情報知識学会」専用の部屋も開かれたりしていた。だが、より濃密な議論を求める専門家たちが次第に集まりはじめ、フォーラムから独立した会員制の会議室を開設するにいたる。たとえば、田良島哲氏の「史料上の電子化と標準化に関するホームパーティ」や毛塚真理氏が運営している「アーキビストの会議室」などが、その典型といえよう。ここでは、様々な研究会開催の情報や研究誌の紹介なども行われており、草の根的な人文研究におけるコンピュータ利用の運動が展開されている。

以上のような一九九〇年代の動向で、いくつかの成果が公刊されていた。これらの共通点は、いずれも活字による叙述だけではなく、電子

化されたデータやプログラムがCD-ROMに収録され、付録として付けられていることである。それが、漢字文献情報処理研究会編『電脳中国学』（一九九八年、好文出版）、同『電脳国文学』（二〇〇〇年、好文出版）、文字鏡研究会編『パソコン悠悠漢字術』（一九九九年、紀伊國屋書店）であり、また専門書の分野では西沢淳男著『幕領陣屋と代官支配』（一九九八年、岩田書店）や小口雅史編著『デジタル古文書日本古代土地経営関係史料集成』（一九九九年、同成社）の様な形で、結実していったのである。

二 研究支援ツールの現状

研究において、なぜパソコンを利用するのか。それは、いうまでもなく便利だからである。それでは、何をもって便利だというのであろうか。入力の作業の軽減化、計算の間違いをなくす、データの検索や保存、といったことがまずほうかんでくる。そしてこれらに共通しているのが、作業の効率化である。研究を進めていく上で、なんとか無駄をなくそうと考えた多くの先人たちは、自分にあつた様々なツールを生み出してきた。そしてそれらは個人的なツールから、研究者にとつてかけがえのない共有すべきツールへと発展進化していった。『電脳国文学』付属のCD-ROMには、そうしたツールが収録されている。

「国文学」とはいつても、電子化あるいはパソコンの利用といった面では、歴史学と多くの共通点があることをこのCD-ROMは教えてくれるのである。人文研究でも、これらのツールを利用しない手はない。こ

これらのツールは、日々進歩しているのであるが、そのいくつかを紹介しておこう。

研究における具体的なパソコンの利用というと、まず先にあげられるのが原稿を作成するためのワープロ機能であろう。これはまた、各種の史料を記録するときにも大いに利用されるものである。そこで、力を発揮するのが入力を省力化するための辞書であろう。ともすると見落としがちなのが、この辞書のシェイプアップなのである。よく使う用語や元号、また史料で登場する頻度の高い短文などを、自分のワードプロセッサの辞書に登録しておけば、いかなるソフトを使う場合でも役に立つことになる。しかしながら、そのためには莫大な時間を要する。それを省いてくれるのが、フリーソフトの各種辞書である。たとえば、『電脳国文学』付属のCD-ROMには、「日本史・文学史辞書」や西暦和暦変換用の「年号辞書」、あるいは「歴史的仮名遣い」へ変換してくれる辞書などが収録されている。これらを自分の辞書へ一括登録すれば、すぐさま使用可能となる。なかなか便利なツールといえよう。

また、歴史研究において常に問題となる旧暦と新暦の換算であるが、これについてはMS-DOS時代から定評のある、須賀隆氏作成の暦計算フリーソフト「When」が収録されている。これをつかえば、和暦元号の年月日がすぐさま西暦の年月日に換算表示される。

その応用として、『電脳国文学』には、「紀貫之が京に入った承平五年二月十六日夕方から十七日朝方にかけての京都における月の出、月の南中、月の入は何時何分？ また、南中高度は？」といった問題を解くために「When」を利用する方法なども紹介されている。ただ、これを使

用する際の方法が詳述されていないため、実際に利用できるようになるためには、少々知識が必要である。紙幅の関係もあつたのであるが、やや不親切な印象はぬぐえなかった。

一方、史料を整理するためのツールも収録されている。スキャナから史料や陰影本の画像を取り込み、電子文字に変換するための「超整理器」というソフトや、デジタルカメラなどで撮ってきた筆文字でかかれたものを、一文字ずつ切り出す文字画像切り取りソフト「スクリプトマスタ―I Version.00」などである。デジタルカメラの普及によって、史料収集はかなり楽になったが、その整理はまだ時間を要する。こうしたソフトの利用によって、省力ならぬ省時間をはかりたいものである。

研究会などでの報告のために、様々なレジユメを作成する折りに、ワープロソフトを使って図を取り入れることは容易になったが、これが家系図となるとなかなか難しい。これを解決するためのソフトも『電脳国文学』付属のCD-ROMに収録されていた。家系図作成ソフト「親戚まつぶさ0」である。これは有料ではあるが、非常に便利なものといえよう。収録されているのは、制限が付けられた試用のものであるが、正規に費用を支払い登録すれば機能制限なしに使えるようになる。

現状では、こうした便利なツールを利用しながら研究を進めることが可能になった。しかしながら、もつとも便利なツールといえ、なんともいってもインターネットであろう。メールの交換による利便性は当然のこととして、それ以外での利用法としては、情報の収集と発信である。欧米の研究者は、既に自分の論文をネット上に投稿して評価を得る、と

いうことを行っている。また、様々な史料をデータベースとして公開しているのは、周知の通りである。

日本においても、特に歴史関係の諸機関では、データベースの公開や史料目録・蔵書目録などによる史料検索手段を提供している。具体的には、先にも述べた東京大学史料編纂所のウェブや国際日本文化研究センター、国立歴史民俗博物館などでも同様のサービスが提供されている。その他、多くの機関でのそうしたネット上の情報提供は枚挙にいとまがない。現段階での様々な人文関係のサイトについても、『電腦国文学』で取り上げられている。

『電腦国文学』は、基礎編として「インターネットで楽々情報収集」、そして、応用編として「情報整理からレポート・論文執筆まで」、さらに上級編として「電子工房としてのパソコン」というように、パソコンをとことん利用できるよう、様々な観点から論述されている。これまでもパソコンを使用していた人でも、新たな発見が必ずあるであろう。

さて、情報の提供といっても、単なるテキストベースだけではなく、画像や音声も含まれつつある。こうした状況の中で、人文研究の電子化は急速な進歩をとげつつあるといえよう。だが、基本的な問題が横たわっている。それは、機種依存文字というものである。ある史料の異字・異体字は外字処理を行ってディスプレイ上に表示されるわけであるが、それをデータとして交換するとなると、受け取った方では正しく表示できないという事象のことである。漢字文化によって成り立っている日本においては、避けられない問題ともいえよう。

この解決方法は、これまでも様々な形で議論されてきたが、もつとも

簡便な解決方法として利用できるのが『今昔文字鏡』である。このソフトには、約九万字の文字が登録されており、検索と入力を可能にしている。データを交換する際に、双方がこのソフトを所有していればいままでもなく問題はないが、たとえ片方が持つていなかったとしても、必須である大修館書店の「大漢和辞典」さえあれば、その文字の確定が可能になるといえるものである。

これ以外にも、まだまだ便利なツールが登場してくるだろう。そうした情報を与えてくれるのも、またインターネットである。他の分野で用いられているツールでも、人文分野への応用が可能なものもあるにちがいない。今後はこうした情報交換も、どこかでなされるようになるれば、研究におけるパソコン利用は効率性をますます高めることになるであろう。

三 今後の課題と展望

パソコンの利用によって、近年の人文分野での研究状況も大きく様変わりしてきたことは否めない。しかしながらその反面、解決しなければならぬ問題や見直す必要のある課題が浮かび上がってきたことも事実である。ネット上での文字に関しては、先に述べた『今昔文字鏡』などのソフトによって、単漢字の表示に関しては改善がみられるものの、異なった大きさの文字をどう伝えるのか。また色の異なった文字はどうするのか、といった問題は未解決である。マークアップ言語の問題である。これに関しては、何度となく議論が交わされてきたし、今でもまだ結論

が出せない大問題といえよう。

また、史料目録や書誌データの標準化に関しても、共通認識が確立されているとは言い難い。どこの機関が音頭をとって標準化を定めるのか。標準化に必要なものは何か、といったことは今も議論が続いている。

「史料類の標準的な記述規則の必要性」の問題である。より深刻な問題は、ネット上で公開された情報や史料は複製が容易だということである。

そのために、情報が氾濫するおそれがあるしその信憑性も問われなければならない。著作権関連の問題も生ずるであろう。したがって、その情報の根源はどこで、誰によって作成されたものかは、必ずその情報に附記されなければならない。こうした記録が、メタ・データと呼ばれる。メタ・データの重要性や標準化の問題も、さらに多くの人々に認知されるべきであろう。

記録管理学あるいは情報知識学、さらにアーキビストを中心とした史料館・文書館問題を考えている人々の間でも、パソコンの利用なかならず史料の電子化の問題について、様々な議論がなされていることも注目すべきである。電子博物館構想の人文分野への影響も、考慮しなければならぬ。

そうした問題があるにもかかわらず、われわれにとってパソコンは魅力ある道具である。

これまでは、自分ひとりで努力してきた史料の集積も、パソコンやインターネットを使用すれば、共同で行うこともできるし、共有・交換も簡単にできる。研究誌や各種史料もテキストベースだけではなく画像で

も取り込むことが可能である。そうしたことを可能にするためにも、いま抱えている諸問題をうまく整理し、解決を図っていかなければなるまい。今後の研究におけるパソコンの利用は、パーソナルでありながら研究者全体に関わることであるともいえよう。

だが、収集された情報や電子化された史料、また各種のツールは、あくまでも研究支援の一つなのである。電子化による利便性を、どのように活用するのかは、ひとえに個人の研究者にかかっている。情報技術の進歩は、研究者のセンスや視点そして良心の重要性を、これまで以上にクローズアップさせるといえるのではなからうか。

(かんだち・こういち 創価大学経済学部教授)